

8 虚学、類語の意味の相違、漢語の用法等作文の実際上の注意を促す。

9 『史記』秦始皇三十五年に「阿房ヨリ渭ヲ渡レバ」の記事がある。

10 明らかに新説。『史記素隠』は唐代三家注の一。『史記』に合刻せられる。この注では「阿房」を宮殿の広壯を言うとする。

11 自序中に「余ガ青年ノ稿本アリ、今再校ヲ加ヘ」とある。

12 『統文章軌範』は明の鄒守益の撰で、謝枋得のとは別種。立之はこの統編に講解を加えていない。

(帝塚山学院大学)

歩兵屯所の医師たち

——『医学所御用留から』——

深瀬泰且

文久二年（一八六二）一二月幕府は慶安以来の兵制に画期的な変革の手をくわえて、近代的な歩兵、騎兵、砲兵の三兵からなる陸軍を創設した。翌文久三年には、江戸城の周圍に四ヶ所の歩兵屯所をおき、万石以下の旗本にその石高に応じた兵賦を負担させて、銃隊を中心とする歩兵組を配置した。この歩兵屯所に常駐する医師として、医学所頭取緒方洪庵の推薦によって、医学所医師七名が出役として屯所附医師に就任した。

その一人である手塚良斎が、歩兵組の動静と屯所附医師の活躍を記した文書が『医学所御用留』（以下御用留という）である。文久三年三月から筆をおこし、幕府瓦解の慶応四年（一八六八）四月までの満五年間の記録で、一〇四丁、半紙本の写本である。

この御用留に名をつらねる医師は総計一〇一名で、屯所附医師として任命された年を年次別にしめすと、文久三年三六名、元治元年四名、慶応元年二名、慶応二年三二名、慶応三年八名となっている。この一〇一名のうち、「医師手伝」の肩書きをもつものは三五名で、これらの医師はすでに屯所附である医師の門人にあたるもので、そのうち二六名についてはその師名があきらかである。医師手伝がはじめて採用されたのは慶応元年のことで、歩兵組の活動が一層活潑になったことに対応したものとおもわれる。

発足当初の医師の勤務は、一ヶ月交代で四ヶ所の屯所を輪番制で担当していたが、病兵からの苦情もあり、治療をおこなううえからも適切でないので、文久三年一月からそれぞれの屯所に医師を専属させるように変更された。その配置表が御用留にのっている。

歩兵組は京都守護のために西上し、一定期間の勤務をおえたのち、江戸にかえるという定期的、常態的な出勤もあったが、幕末の混乱した世状を反映して、東に西にと出勤する機会はおおい。御用留からそのいくつかをひろってみる。

元治元年の水戸天狗党の乱には、若年寄田沼意尊を総督として追討軍が組織されて、歩兵頭を指揮官とする歩兵組も何回となく出陣し、それと行をともにした医師の名前があげられている。

同じ年將軍家茂も二回目の上洛をしたが、このときも西丸下と大手前の歩兵組がこれに扈從し、同行医師として手塚良仙をはじめ八名の医師の名がみえる。さらに家茂の三回目の上洛（慶応元年）にさいしては、著者の手塚良斎も歩兵組にしたがって大坂におもむいた。良斎は閏五月四日に江戸を出発し、途中木曾川の洪水などにあつて旅程はおもうにまかせず、大坂についたのは六月二二日のことであつた。このとき西上したのは良斎と高島祐啓の二人の取締をはじめとして、呉、黄石ら九名の医師たちである。

大坂においては全慶寺、宝樹寺、興徳寺、大応寺などが病院として使用され、長州征討軍の西下にともなつて良斎らも広島に移動し、広島においても船舟寺、徳永寺、善生寺、永照寺、興徳寺、常林寺などが病院として使用されている。

家茂の死亡によつて長州征討軍は撤退することになり、

良齊は広島在陣中に病をえた老中水野出羽守忠誠につきそって大坂にかえり、ついで大坂から病兵をひきつれて帰府した。

この御用留には、以上のべた歩兵組の出動にあたって同行する附添勤務医師の記事のほかに、医師の手当や薬料のこと、蓄髪のこと、服装のことなどがしるされている。

(順天堂大学医学部医史学研究室)

医師マンローの業績

桑原千代子

第八四回横浜総会に於ける抄録発表の永い歴史を有する横浜山手病院は、三年前解体され既に跡片もない。八代目院長のマンローは軽井沢サナトリウム院長を経て、医学の他に考古学・人類学上不朽の業績を残し、終焉地となる北海道沙流郡平取村二風谷ニフタダアイヌコタンへ、故国のロンドン大学セリーグマン人類学教授の推挙で、ロックフェラー研究奨励金を得て昭和五年秋任くのだが、人類学研究よりもアイヌ民族が様々の疾病に苦しみ、特に和人より感染した結核は猛威を振り、当時三五戸のコタンから年間二七個の結核死による大人の柩を出した。小児の死亡数も入れると約三倍になる事に驚き、結核撲滅を主に医療に献身する。

後石器時代から縄文期にかけて全日本列島に居住したアイヌ民族が、蝦夷征伐の名の下に次第に北へと追いつめられ、最後の砦となった蝦夷地アイヌ・キンリすらも和人の入植で次第に侵